

崑崙の石 (60・11・16)

——非NHK的シルクロード——

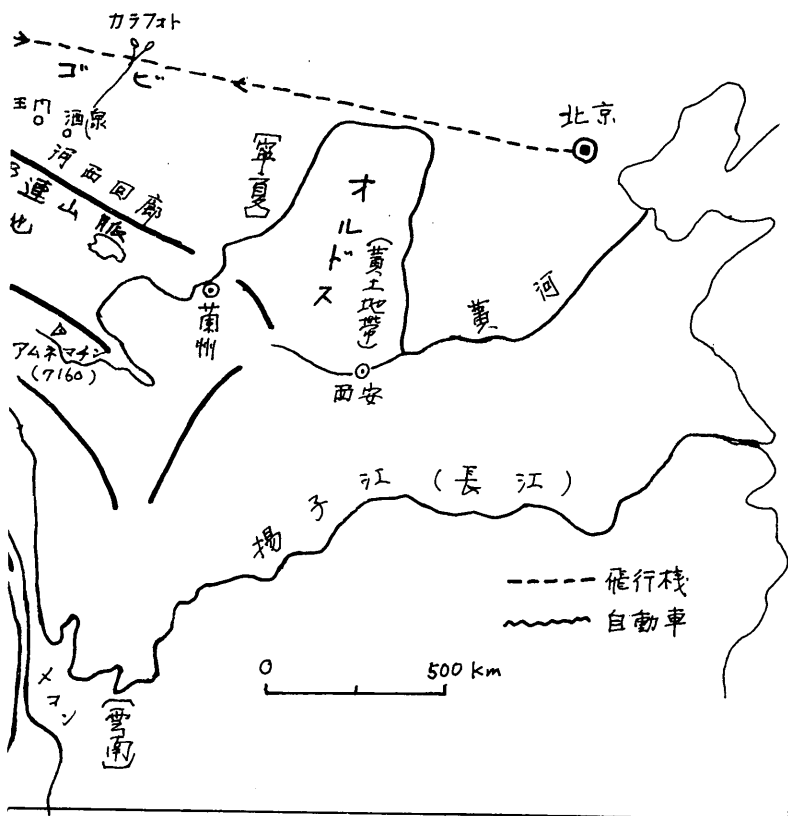
藤田 和夫 (昭16理乙)

藤田でございます。えーただ今、四手井さんから大体の紹介がありましたけれども、私はもともと地質学をやってきたのですが、最近特に、まあ「地震地質学」と言いますか、地震と地質とがどのような関係にあるかが大きな研究テーマになってまいりました。特に中国で最近になって地震と断層との関係が非常にはつきりとしてまいりました。そんなことで今度に限らず中国に何回も参っておりますが、ついこの間も山東省の方に行つて、十四日に帰つたばかりであります。というようなことで、中国には非常に古くから親しんでいます、三高の三年生の時に、今民博の館長をしております梅掉忠夫君と北鮮と中国東北の国境にある白頭山へ登つたのが最初でした。それから京大時代に今西さんなんかと、北部大興安嶺に参りました。戦後には地震の関係で雲南省、次いで寧夏回族自治区にあるオルドスのあたりに参りました。そして今度、この夏に四手井

綱彦、滝川悠紀夫、近藤良夫、山口 克さんらと一緒に、これからお話しします中央アジアのウイグル自治区へ参ったのであります。今度は発売早々の八ミリビデオをできるだけとってききましたので、それを見ていただきたいと思えます。

えー、今回京大、同志社大、中国合同登山隊が遠征しましたナムナニ峰というのはここなんです(地図参照)。ちようど父なるインダス河と母なるガンジス河がこの辺で分れる。まあチベットのおへそみたいなどころなんです。この奥に有名なセントカイラスという、いかにも聖山という感じの山があります。そこにはこの頃はテレビも入りまして、何回か放映されていますけれども、巡礼をしてここを回ると来世に幸福が来るといって、まあチベット族のメツカみたいな所なんです。その南側に処女峰ナムナニ峰というのがあって、三高・京大でも昔からねらっていたところなんです。従来チベットというのは、今まで非常に入りにくかったんですが、南のインド側から入るといってチャンスはないこともなかったのです。インド側ではグルラマンダータ峰の名で知られていますし今度のように北のカシユガルからチベット高原を越えていったのは初めてです。ここがカシユガルです。それを南に下り、崑崙を越える峠を越えチベット高原へ上ります。これから約四千五百メートルの高い所をずっとキャラバンをして、ナムナニに登りにいったわけです。このルートは、今度初めて外国人に開放されたルートであるという点が、我々にとっては非常に魅力があったのです。何とかいつてみたい。それで山のOBで元老団ガンロッツというのを組

モンゴル





織りまして、登山隊が帰ってくるのをこのカシュガルで迎えようというので、五十歳以上の昔の夢が忘れられない年寄りが集まったわけです。どういうルートで行ったかと申しますと、北京から一挙にジェット機でウルムチ(烏魯木齊)という所へ飛びました。これが蘭州で中国西北地区への入口です。これがチベット自治区です。これが天山山脈ですねえ。これがタクラマカン砂漠、パミール高原、そしてこれをアルチン山脈といいます。三高の歌に出てまいりますコンロン(崑崙)山脈というのは、ここパミールから発しまして、ずっと東へ東西に延びています。そうしてこの西の端あたりに、昔から三高の山岳部で夢にも見たアムネマチンという山があります。一時エベレストより高いのではないかと騒がれた山です。そしてこの間に三角形の高原部分があります、これをツアイダム(柴達木)盆地と呼んでおります。で、揚子江と黄河はこのあたりから出るのですが、北と南に分れてしまいます。揚子江源流と平行に、メコン、サルウィン、イラワジというような大河が接近して南に流れるわけですね。このあたりは植物の方では非常に魅力的な所として、キングドンウォードというイギリスの植物学者がこの辺の事を書いた探検記が有名ですが、四手井さんもこの辺に行かれたら満足されたかもしれないんですけど、とうとう今度はこんな植物のない裸の所へ行ってしまったわけです。それで、えー、三高の歌に歌われています「崑崙の高嶺のこなたゴビの原」っていうのはゴビの砂漠のことですね。砂漠でも二つの型がありまして、こちらは、タクラマカン砂漠、こちらはゴビの砂漠と言います。そしてこの辺が

山西省の黄土地帯、まあ黄色い土の国といわれるところです。結局このゴビの砂漠の辺りから、黄土が風で運ばれて黄土地帯へ溜まるわけですね。で、タクラマカンの方は砂丘があつて砂漠らしいところなんです。ゴビの方は、土砂がほとんど飛んでしまつて、下の岩がゴツゴツと表面に出ています。それが黒い色をしていますから黒ゴビなんていわれるのです。ゴビの砂漠についてのは、結局岩がいっぱい出ている砂漠という意味で、タクラマカンとは非常に違うのです。で、このゴビの砂漠を越え、一気にウルムチに飛びました。それから双発のおんぼろ飛行機に乗り変えて、今度は中国の最も西の奥にあるカシュガル(喀什)へ行きました。そしてここから車を乗り次いで、ここを崑崙山脈を越えるアカズ峠という所まで行つたのです。そしてまた一度ちよつと引き返して天山南路の阿克苏というところからまた飛行機でタクラマカン砂漠の上を横断して、ホータン(和田)に着きました。ここは井上靖さんの「崑崙の玉」という小説で有名な「玉」が出る所なんです。それからまた飛行機でウルムチ経由で帰つてきたというルートです。えー私、今まで中国に行くのは大抵仕事を持つていたものですから余裕が少なかったのですが、この旅だけはおかげで何もなくてもいい。みんな四手井さんと近藤さんがやってくれて、こんなうれしい旅行はない。そしてそこへ行く直前に、「ビデオエイト」というソニーから出した小さいビデオカメラが手に入ったものですから、今度はそれで徹底的に写してやろうということ。カメラの虫になりました。案外良く写つてまして、今日は皆さんに口で話すよりも、このビデオ

を見てもらうのが一番良いと思って参りました。で、えー、皆様は多分NHKの「シルクロードの旅」を御存じ、いや、御覧になったと思いますけれども、実際行ってみますと、あれはまさに演出である、日本人好みのロマンの総集篇だという感じがいたします。

これからお見せするのは、副題として「非NHK的シルクロード」とつけたいと思うのですが、生のシルクロードを見ていただきたいと思うのです。もう一つ強調しておきたい点はですね、えーまあ、私は学術的にも使いたいという点もあって、ある部分は長時間撮りっぱなしにする部分もあるんですね。ロングですつといきました。テレビの番組のは良い所だけをパツパツと撮って繋ぎあわせて、一時間とか半時間に縮めて編集したものですから、全体のイメージとしては、やっぱりリアルな実態が出ていないと思います。そういう点では、私のは飛行機の上から一時間位撮りっぱなしにしたりしてありますから、そのまま写すと同じような砂漠ばかり出てくるところが、かえてこれが砂漠の広さを味わせてくれるというわけです。崑崙のアカズ峠へゆくのもこの葉城から車で出発しましたが、そこからこの峠の上まで、途中まあしばらくは休みましたけれども、殆んど全部撮りっぱなしにしました。後から見ますと、非常に臨場感があつていいという評もいただいています。録音は全部アフレコでない現地録音です。自動車のギアチェンジをするギーツといった音や、キャットという悲鳴も皆現地録音で入っております。しかし全部お見せするのはとても時間がございませんので、まあサワリの所だけと思つてうかがつたんですけれ

ども、どうもビデオデッキが離れた後の方にあるもんですから、うまくコントロールできないかもしれません。そのへんは御容赦願いたいと思います。

ビデオの順番を予告的にお話ししておきます。一番初めに寮歌に出てくるゴビの砂漠を見ていただくことにします。そして砂漠を越えて天山山脈を横断するあたりをちょっとお見せします。これが有名な西安、唐の都の長安、これが河西回廊、この辺で万里の長城が終わりまして、ここからいよいよ西域に入るわけです。ここは、キレン(祁連)山脈という山脈です。ここには私の専門の断層が非常にたくさん走ってまして、地震の多い所です。このキレン山脈が見える所から始まりまして、この辺の岩がいっぱい出ているのがゴビの砂漠です。この中に一本鉄道が通っております。一度乗ってみたいと思っておりますが、まあこの辺の状況をひとつお見せします。それから天山の、その雪山が出てくると、間もなくウルムチへ着陸致します。その次は今度カシユガールで登山隊を迎えます。そしてそれが終わって、これからアカズ峠へ登るわけです。まあこの辺でおそらく時間がなくなるかもしれませんが、アクスから和田(ホータン)への砂漠の上空……。これが昔、スーエン・ヘインがタクラマカン砂漠を横断する時に水がほとんどなくなつて死にかけたところですよ。『中央アジア探検記』という本が戦前に出ました。岩村忍さんが訳された非常な名文です。前は読み流していましたけれども、やっぱり現地に行つてからそれを読み直すと、いかに大変だったかということがよくわかるんです。ここ、ホータン(和田)という所は、

崑崙山脈から流れ出るホータンダリア(河)の河床を埋める石ころの中に玉が混っていて、その細工が有名なんです。この部屋の入口の太鼓の横においてありますから、帰りに御覧になっていたと思います。箱の中に岩石がいっぱい入っておりますが、それは今日はおみえになっていないようですが滝川さんが重いにもかかわらずへばりながら持って帰られた貴重な石で、角ばっているのがアカズ峠の石です。円い石が崑崙の玉です。これはまあ三高会館としては非常に意味のあるみやげ物だと思います。これは滝川さんの努力によるものです。しゃべっているよりも見ていただいた方がいいと思います。最初がまず、このキレン山脈が見える所、ゴビの砂漠、そしてウルムチへ着陸するところ、もうついでに言ってしまうけれども、この辺はウイグル族の多いウイグル自治区といまして、漢民族じゃなくて、えー、トルコ系の民族です。回教徒が殆んどですが、これも厳密な回教というのじゃなくて、割合明るいつつたらかおかしいですけれども、解放的なところです。ですから中国に居て中国にあらず、中国に居るような感じは全くしませんで、民族衣装も非常にカラフルで、えー、まあ非常に楽しめた所です。この辺を先に写してみたいと思います。

ービデオー

ここに見えてきましたこの白い雪山の線が祁連山脈です。えー、ここですね、今、河西回廊の上を飛んでいます。これは中国航空のジェット機なんです。この下に玉門だとか酒泉だとかがあ

るわけですね。このあたりが砂漠なんですが、この黒い所は岩が出ています。ですから砂漠といっても、砂丘があつて「月の砂漠」的イメージの出るのはタクラマカンの砂漠だとかサハラ砂漠で、ゴビ砂漠というのは何と云いますか黒い岩が出ています。こういう低い岩山がちよいちよいあつてその間を砂が埋めている、砂漠らしくない砂漠です。そういう所にも時々洪水があつてこの川が流れるわけです。この白い筋は川の跡です。この辺がその昔から、ウルムチに行くのに隊商や探検隊が一番苦しんだ所でしょう。（ずーっととばして下さい）まあこの様な風景が延々と続きます。おそらく地下から岩盤が隆起してきてるんだと思うんですが……。まだこういう状態が続いています。まあ一度、下で見てみたいと思うのですけれども、上からではどうということになっているのかもわかりません。こういう模様ばかりです。何か地質と関係があるんですね。（とばして下さい）本当は十分ぐらいこういうのを見てもらわないと砂漠の広さが味わえないのですが、そうすると時間がございせんから。えー、道か、鉄道か。これも川ですねえ。もう水が一滴も無いんですが川の跡だけが残っている。このむこうがタクラマカン砂漠です。（とばして下さい）少しオアシスが出だしました。ここは有名なカラホトという所で、あの西夏、西の夏と書きます。西夏文字は近頃有名になってきましたけれども、西夏の都があつたのはここなんです。井上靖さんの「敦煌」という小説に出てきます。で、オアシスが次第に出だしました。少し畑がありますね。もうすぐに鉄道が出てくると思うんですが、（とばして下さい）これを撮つて

いると首をねじまげこうやりますから首が痛くなりますが、まあ辛抱して撮ったわけです。あ、これが鉄道ですねえ。これが駅です。これがウルムチへ行く鉄道です。二晩かかるそうです。これは、一度ぜひ乗ってみたいものです。まだ延々と続く。だんだんと小さいオアシスが出てまいります。これは恐らく、陸上を行くと、こういうのはほとんどわからないと思うんです。砂が出てきたり岩が出てきたりするだけ。これも鉄道ですね。こういうのが延々と続いている。これは鉄道です。(これはいつ頃できたんですか?) いや最近、五、六年前だと思えますが、貫通したのは。(はい、とばして下さい) で、もうじき天山山脈が見えてきます。はい。これは、天山山脈が見え出したところですね。今このあたりがトルファンでしょう。えー雪山が見え出したところですよ。ここにボコダ峰という一番高い山(五四四五米)があるんですが、これがボコダの前山です。だいたい四千メートルぐらい。この一番低い所が砂漠で、中段の三千米辺が緑で、この辺りの四千米以上が氷河帯ということになるんです。ここに割合と平らな所が見えますが、ここに非常に緑豊かな牧草地がありまして、カサク族という騎馬民族がこういう所に住んでいるのです。こういう所は非常にきれいな牧場です。NHKのシルクロードで放牧の馬がパーツと散りながら走るところを撮ったのはこの辺だと思えます。これが砂漠ですね。で、これが緑、これが氷河とこういうことです。えー、その関係が非常によくわかります。(とばして下さい) 下は砂漠ですねえ。これが四手井さんの好きな緑のあるところです。非常にその変化が激しいですねえ。そ

れで氷河から出た川の水が流れてきたところの砂漠の中にオアシスができる。(とばして下さい)これは、ボゴタ峰ですね。何ほありましたかなあ。五千何ほある?。これも日本人が最近登りに行ってます。(はい、とばして下さい)今度はウルムチ、天山を北にまわりましてウルムチに着陸するところです。これはウルムチの近くです。まわりは砂漠なんですけども急に緑がでてきます。今、着陸体制に入って、エンジンがキーンという音に変ってきます。この新疆省の首府は人口二〇〇三〇万、工場もあつてかなり立派な町です。だんだんと緑が出てきます。これもう町に入りかけたところですねえ。

まあこれでもいいという所の、いわゆるオアシスがどんなものかというのを見ていただけたと思うんですが。それは畑ですね、麦ですね。こういう風な工場もあります。こういうように着陸するまで連続的に写しますと町の様子がよくわかります。北京から何時間ぐらいでしたか。北海道から沖繩にゆく位の距離です。飛行場です。えー、今度はともかく日中友好というんですぐにVIPルームに入れられまして挨拶が始まる。これは必ず、全部それが出てくるわけです。これはウイグル帽っていう帽子なんですね。ウイグル人です。これは元老団、これは橋本龍太郎さん、前の厚生大臣の。

次に映しますのはカシユガールに着いて、登山隊を迎えるところです。非常な歓迎でして、町の小学生がみんな集まって太鼓たたいて大歓迎をやってくれたんですが。登山隊の着くのが遅く

なったので、彼らは並んで予行演習をやるんですけれども、なかなかこない。そこへ私がテレビのカメラを持って行ったんで、えらくはりきってですねえ、予行演習をやってくれたのです。非常にかわいい。(あっそれ、いやもつと先進めてください)これはホテルで挨拶をするところですねえ。これがカシユガール市長、必ずこういう挨拶がまずあります。このあいだ日本にもやって来ました。ウイグル人特有の顔をしていますね。(はい、とばして下さい)あっ、これこれ、歓迎団の……。ホテルの前にずらーっと。これを予行演習でやってくれた。まあカシユガールの風俗を見るのにとってもいいと思います。ちよつと中国みたいな感じしなくてもすけれども、非常にモダンです。これは、田舎の？ 歌舞団で、いろいろダンスをして見せてくれました。これは恐らく四手井さんも、近藤さんも知らない場面だと思います。これはトルコ系ですね。非常に美人が多い。やっぱり非常に暑いですね。27〜28度か30度、しかし乾燥していますからねえ。凌ぎやすいです。女の子は、こういう帽子を着るんですね。おとなのダンス。(はい、ちよつととばして下さい)はい、これは小さい十歳ぐらいの子供のダンス。これがなかなか色っぽいダンスです。登山隊が入ってきたところです。ここで電池が切れたんで残念です。(はい、ちよつととばして下さい)これはパミール高原の入口の所です。むこうはパミール高原ですね。ちよつと今、この山に入るところです。西の端ですね。これからパミール高原に入るところです。で、これ、谷をずっと伝って今度南に降りていきます。(はい、とばして下さい)かなり悪い道です。これ

がパキスタンに行く公路ですからねえ。これは、氷河が残していったモレーン、石ころが、非常に高い所にのつてゐるんです。昔大きな氷河があつた証拠です。二万年位前といわれています。

再びカシユガールに帰ってきました。カシユガールではダンスがものすごく盛んなんです。その夜ダンスに招待され、民族舞踊をみせてくれるのかと見に行ったら社交ダンスです。チャップリンの物まね演劇までついている。まあとにかくカシユガールというのは非常に中国ばなれをしたモダンな所です。その翌日、登山隊の大歓迎パーティがあつたわけです。まあちよつとだけ御覧に入れます。はい、これは歓迎場、日中友好ナムナニ峰連合登山の幕です。これはメインテールです。それに登山隊から運転手まで皆います。まず、市長の歓迎の言葉です。(え)、とばして下さい) 料理は豚はありません。羊ですね。回教徒が多いから。はい、これは桜内義雄さんの挨拶です。次は、四手井さんの御覧にいきます。四手井さんでもこういう礼装を着られる時があります。通訳の女の人は、まあ中国人なんですけれども、日本で育つて相愛女学校を出たので、日本人と同じ日本語です。(はい、とばして下さい) こうして延々と祝賀の宴が続くわけです。これがメインディッシュですね。丸焼き羊の。これが副隊長です。これが四手井さん。これが中国の閣僚級の黄中さん。これが日本側の隊長、京大AACKの斎藤淳生君です。はい、まあこういう事で延々と祝宴ばかりやっておりまして、そしてその日の晩です。はい、これはその劇場で歓迎舞踏会。こういうのがまた延々と続くわけです。その日の夜更けです。四手井さんの部屋、

滝川、近藤、山口にさっきのチャップリンもやってきて踊ってるわけです。橋本竜太郎さんも加わって三高山岳部の「雪よ岩よ」の大合唱となりました。(はい、とばして下さい)

これからが一番のハイライトで、崑崙に登るところです。葉城という所。ここまでバスで行き、一泊してマイクロバス(三菱製)に乗って峠へ向います。(ちよつと電気つけていただけですか。そこでちよつとビデオはストップしておいて下さい)実は今この部分をランドサットという人工衛星で撮ったのがこれなんです。これが崑崙山脈です。その北側のタクラマカン砂漠でその差がよくわかります。これがオアシスで木のあるところです。ここは葉城です。そこから出発しまして、この砂漠の中を通過してこの崑崙に向います。約三千四百ぐらいの所までですが、これだけ御覧になってもなかなか大きさがわからないと思うので、同じ縮尺で日本を撮ったものと比較してみます。この地図の中に、近畿地方ほとんど全部入ってしまうわけです、全部。この位のスケールだということで御覧いただきたいと思うのです。ただこれだけ見ますと、ただ砂漠が、山があつてつていうようなもんですけれども、大きさが全く違うんです。まあついでにこれも御覧に入れますけれども、これは一枚全部がタクラマカン砂漠の中です。ここにこのミミズがはつてる様に見えるのは砂丘ですね。これも日本のと合わすとよくわかるんですねえ。一つの砂丘がこちからここまでぐらい続いています。ちよつと琵琶湖から京都ぐらいまで砂丘がずっと続いているわけです。で、これ乗り越えて行くというのも、まあ生駒山の様な砂山を乗り越え、乗り越

え行くわけです。らくだを使っても、そう簡単には横断ができない。まあ大変なところだと思います。ですから「月の砂漠をらくだに乗って」なんていうイメージとは違うのです。

さてこれが葉城の出発点のバザールです。白い帽子が回教徒の印です。これから今、これ南へ出発します。もう砂漠みたいなどころばっかりです。まあ、これから峠の上までずっと撮りっぱなしでいきますから、十分実感を味わって下さい。これは、その氷河時代、今から二万年位前です。ねえ、この辺が大氷河に覆われ、氷河で削られてできた細かい岩粉の堆積した地層です。おそらく当時水があつたんだろうと思います。これが最後の部落。これは今、トラックで水運んでいるんです。チベット高原上の軍隊に。これは中国の軍事道路だと思えます。ですから一般は通れないのですけど、今度は自由に写真も許してくれました。これは岩肌に全部黄土の岩粉がかぶっているのです。お化粧した様な状態になっております。岩は出てこない。山はみんなこのように泥を塗ったようになっていきます。らくだが放牧してあります。痩せ衰えています。だんだん山に近づいてきます。今エンジン、セカンドギアに切り換えたところです。これから急速に約二千メートル登るんです。ガードレールが全然ないんですね。だから上から降りてくる車とすれ違うのですけれども、早く見つけた方が山側に寄りよる。そうすると、後の方が谷側を通らなければならぬ。早く見つけた方が勝ちらしいです。鳥が飛んでますねえ。道はいつつも補修しているようです。やっぱり軍事道路ですから。はるか上の崖ぶちを先行の車が走りますねえ。崖壁

に鳥がとまっっているようにみえます。この辺になって、岩肌が出てきていますね。ワーツという嘆声が届えますが、これは現地録音です。まあこの辺が一番急な辺りです。今三千メートル突破のところ。高度計を見ました。羊でもこんな所まで上がってくるんですね。ああいうヨモギ科の草を食べにやってくるんです。運転席の横で、こう頑張っつて腰を浮かしながら撮ってるわけです。これが峠ですね。これがアカズ峠。峠の向こうがチベット側です。もう一回降りて、またもう一度上がるとチベット高原です。いよいよ岩石採集の実況放送です。滝川さん、割合うまいよ。あの手つきはいいんです。ここで割ったのが今部屋のある石です。鷲が飛んでいます。あの持って帰ってきた岩は花崗片磨岩といまして、約三億ないし四億年前の岩ができた古い変成岩です。しかし崑崙山脈が三億年も四億年も前にできたというんじゃないかと、その岩ができたのが古いんで、崑崙が現在のようにもち上がってきたのは、せいぜい千万年以内。一番隆起したのは、この百万年以内と考えられるようになりました。

次は天山南路の中央あたりにあるオアシス都市アクスを紹介します。アクスというのは、とにかくここへ外国人を入れるのは初めてだそう。全然未開放だったんですが、初めて入れてくれました。そして非常に歓迎してくれました。そしてアンズの果樹園の緑下で踊りを見せてくれたんですが、本当によかった。それだけ最後に御覧にいたいと思います。(はい、ずっとはして下さい)アクスはカシユガルへ行く往路でもランディングしたんですが、その日は風がき

つくてもう飛べないっていうんで、一晚強制的に泊めさせられました。その時はむこうも予定してなかったもんで非常に設備が良くなかったですね。便所へ行ってももうびっくりする位でした。ところが二回目に帰ってきたらきれいな便所が建っている。天皇陛下みたいなものです。(はい、もうちょっと)とにかくオアシス、オアシスっていいますけれども、一つのオアシスが十万とか二十万とかいう人口ですからねえ。いわゆる月の砂漠式のものとか全く違うわけです。(はい、まだもうちょっとと先です)今カシユガルを出発しアクスに近づいたところですよ。アクス川という、天山山脈から流れてくる川がでてきます。はい、これがアクス川です。そしてアクスのオアシスがでてまいります。ま、こういうかなりはつきりした区画の道が付いているところを見るとこれはやっぱり革命後にやった仕事だと思えます。この辺は新しくできた農耕地だと思えます。もうかなり刈取りやっています。ほとんど小麦だと思えます。これでまあ新疆の代表的なオアシスを御覧頂いていると思うのです。まだあんまり観光地化されていないし工業化もされてない。カシユガルとかウルムチはかなりもう外部勢力が進入しています。あそこに白いのが見えてきましたねえ、あれから急に砂漠みたいになります。飛行場があの上にあるんですが、あれだけはつきり境界がある。これは新しい村だと思えますねえ。人民公社的な。これが古い町です。町に接する黄土の台地に飛行場ができて、今そこへ着陸します。これはやっぱりレス、黄土の堆積ですねえ。こういう様に鋭い亀裂が入ります。(はい、とばして下さい)果樹園で我々の歓迎パーティー

イをやってくれました。これは非常によかったです。これがまあ助役さんというところですかねえ。ウイグル人です。これは歓迎のダンスです。NHKですと民族衣装ということになるのですが、これが素顔、平服の彼女たちです。いやー、きれいな人が多いですよ。歌はうまいし、二十年前の日本の女子学生を見る様な清楚な感じですよ。そのまま日本に連れていってもわからないくらいです。まあこれの撮り方はプロが見てなかなかいいって言ってくれました。なかなかうまいとあつ、これはインド系ですねえ。これはアプリコットですねえ。杏あんずです。それと栗と。この水色の彼女がどうもりーダーなんですよ。吉永小百合によく似ているんです。よう見といて下さい。男でも足長ですし、すらーっとしています。日本人も混って踊り出しましたが、体型のずんぐりしているのはだいたい日本人です。とうとう桜内さんもさそい出されて踊りに加わりました。これが市長さんです。これはめったに見られない場面です。四手井さんは出られなかったんです。三高はダンスが不手なんだな。(はい、とばして下さい)これまでが現代の音楽で…。これから昔からの盆踊り式の音楽と踊りが始まります。ああこれこれ、これが古い土地の音楽です。おじいさん、おばあさんが単調な踊りを繰り返します。次に独唱が始まります。はい、このお嬢さんは、ウルムチの音楽学校に行っているという。こういう歌をいろいろ歌ってくれます。次から次へと男性も歌うし、まるでオペラ歌手みたいなおばさんも出てきまして、プリマドンナみたいにみえます。

時間もございませんから最後、タクラマカンの砂漠の上空。黄砂でぼやっとしていましてあんまりよく映らなかつたんですけど、とにかくタクラマカンの真中辺りを見てもらいます。ちょうどスーエン・ヘディンが死にかけたところですよ。(はい、一遍止めて)これはまた飛行機でアクスを出発したところですよ。はい、これ天山から流れ出た砂河が砂漠の中に消えていくところですよ。白いのは塩。これがだんだん川がなくなっていくあたりですよ。ついに全然なくなつて、次に今度は崑崙山脈からくる川にこう移るわけです。だんだん砂漠の中心。もうこの辺りになると水、ほとんどなくなるわけですね。で、少し砂丘みたいなのがです。プロペラ機です。おんぼろですね。ソ連製だということです。これは少し砂丘が見え出したところですよけれども、まあちよつと見えますねえ、砂丘が。クリアーじゃないんで。これがホータンダリアっていう崑崙山に発してホータンを通る川が見え出したところですよ。タマリスクという乾燥に強い砂漠の木がこう生え出して、スーエン・ヘディンはここにたどり着いてやつと助かるわけです。ここですよ、この辺り。ホータンはかなり大きな町ですよ。毛織物の工場もあります。われわれの乗つたのはチャーター機ですよけれども、普段でも飛んでいます。井上靖さんなんかも訪ねています。まあだんだんと観光地になると思います。(はい、とばして下さい)ホータンの部落ができたところですよ。まあ今飛行機で見えていますけれども、飛行機のなかつた頃はどこへ行くにしようかこれは大変なところですよ。そういうところで暮らしているんだから不思議だよなあと思つたですね。

ほんとに隔絶した、とにかく砂漠と高山とがピシャッとひつついてるといふ感じ。井上靖さんの「崑崙の玉」っていうのを読まれるとこの辺のことがよくわかります。これはホータンの最後の祝宴です。えー、山の連中だからこういうように肩をくんで踊る。現地の人も加わって「北国の春」を歌いましたが、知らないのはいなくらい。ホータンにいつて歌ばかり歌って帰ってきました。これはいよいよ近藤先生出馬の巻。そして市長さんのおくさんが踊り出す。はい、これで終わらして頂きます。

(帝塚山大学教養学部教授)